

助手

日本畫科勤務

山田 廉 號不鳴 埼玉

漆工科勤務

高野 重人 熊本

漆工科勤務

山崎覺太郎 富山

美術史研究室勤務

鎌倉芳太郎 香川

書記

會計主任

正七位勳七等 足立芳五郎 東京

會計掛

從七位勳八等 筒崎 謙齋 秋田

教務掛兼庶務掛

勳七等 增井 兼吉 東京

文庫掛主任

帝國美術院書記 北浦 大介 奈良

庶務掛主任

陸軍歩兵少尉正八位 芹澤 閑 茨城

雇

宮本 純一 茨城

會計掛

利部房太郎 静岡

文庫掛

青山 正治 東京

庶務掛兼教務掛

勳八等 木村 周吉 東京

會計掛

金田 春吉 東京

會計掛

佐藤 重吉 東京

金工科勤務

宮坂福太郎 東京

文庫掛

勳八等 谷本千代雄 山形

教務掛

富田簇治郎 奈良

會計掛

古宇田正雄 茨城

監視

渡部千次郎 東京

文庫掛

佐藤 ツル 新潟

〔東京美術学校一覽(從大正十二年)より転載) 至大正十四年〕

④ 結城素明の在外研究

大正十二年四月十八日、日本画科教授・理事結城素明は文部省より「支那繪畫研究ノ為滿一年間英吉利國佛蘭西國及獨逸國へ在留」を命ぜられ、同年五月十日に出発した。日本画科教官の国費留学は下村觀山に次いで素明が二人目であった。

素明は一年間の滞在を予定していたが、私費延長して大正十四年三月四日に帰国する。留学の研究目標はロンドン、ベルリン、パリの博物館が收藏する敦煌および西域の壁画を模写することにあつた。その点については在外研究員派遣の「上申書」(大正十二年二月十二日発送)「從明治四十四年至大正十四年、留学生・練習生ニ関スル書類、庶務掛」に次のように記されている。

近年支那國ニ於ケル六朝盛唐ノ遺蹟ハ西人ニ發見セラレ獨逸國ノ「ルコック」氏「グルンウエーデル」氏ハ庫車ヨリ佛國ノ「ペリオ」氏「シヤパンヌ」氏及英國ノ「スタイン」氏ハ燉煌ヨリ發見シタル畫、壁畫、佛像其他ノ畫図ハ實ニ莫大ノ數ニ上リタルモ悉ク各自ノ本國ニ齎歸シ現ニ各國ノ博物館ニ藏シテ専門家ノ研究ニ供セリ 是等ノ繪畫ハ六朝盛唐ノ時ニ方リテ東西文明ノ互ニ接觸セル地點ニ於テ發達シタル藝術ニシテ實ニ氣象雄大渾厚ヲ極メタルモノナリ 斯ノ如キ繪畫ノ研究ハ臆テ將來ノ繪畫ノ傾向ヲ研究スルニ屈竟ノ資料タルベキヲ信ス

我々日本畫科ニ於テモ將來ノ日本畫カ如何ナル方向ニ進展スベ

キカハ尤モ深キ注意ヲ以テ研究セル所ニシテ殊ニ教授結城貞松ハ此點ニ就キテ深厚ナル素養アリ又研究ニ趣味ヲ有スルモノナルカ故同教授ヲ此際在外研究員トシテ英獨佛三國ニ派遣シ此遺蹟ニ就テ直接ニ研究セシメバ日本畫教授上及ヒ將來ノ日本畫ノ進展ニ多大ノ効果アルヘキニ付本年四月ヨリ滿一ヶ年ノ豫定ヲ以テ派遣セラレンコトヲ切望ス

東京出發當時の諸新聞を見ると、素明はフランスに二十年間在任していた弟の森田菊次郎がフランス人の妻の入籍手続のため丁度帰国していたので、森田に通訳を任せて一緒に渡航したことがわかる。

次に掲げる素明の正木直彦宛書簡（本学芸術資料館蔵）は滞欧中の様子をよく伝えている。大正十三年七月十五日、パリの寓居 Rue la Fontaine にて認めたもので、『東京美術学校校友会月報』第二十三巻第五号にもこれを多少訂正したものが掲載されている。

拝啓此頃の東京ハ暑中定めて難凌御事と推察いたし居り候 尊家態々御清安為被涉慶賀いたし居候 其後遂々と御無沙汰申上日々なんとなく忙しく相成加へての不精にて誠に恐縮いたし居り候

今春ハ当地御滞在の 東久邇宮殿下御下命にて扇子数本を描き候 それハルーマニア御訪問ありし時皇后其他女官への御進物になりしものにて当地巴里製の洋扇にて花鳥の密画を作りし由にて張らせ申候 殿下御帰來の後非常に好結果皇后大満足なりし由にて晚餐を賜り候 此の製作を終りて後に伊太利見物ニ出發いたし候

再び伯林に至り博物館ニルコック氏訪問いたし候処折悪ク病氣中にて不面會、昨年模寫の承諾ハ得置き候え共模寫ハ断念いたし候（然し幸ニ其後大学にて作る事ニ相成候）

伯林ヨリ帰來白耳義伊達大使よりの依頼にて同国美術展覽會への出品畫を作り候 それハ昨年日本の震災の際ニ同国の画家より日本大使館へ罹災者救助の目的にて絵畫数十点の寄贈を受けたるに對して同画家連の申出にて本年の展覽會へ日本画の出品を希望あり抛て大使ヨリ使にて下相談を私ニ有之候、然るに日本画と謂ふ事になると、とても難問題ニ不可能の事に有之候故結果当地及倫敦在留の洋畫家を選り出品を集るニ事（マツ）して一室を埋める事ニ相成候 私も数点製作いたし候 何等の準備も設備も無き処にての製作ハ大ニ閉口いたし候 幸ニ好評にて好結果と申事ニ御座候

私ハ昨年当地着後直ちにギメー博物館にてハツカン氏ニ面會模寫の承諾を得（伯林ルコック氏への紹介状も貰い候（レ））あり候処同氏ハアフガニスタンへ佛蹟調査の為ニ派遣せられ候に就き更ニ再びメートル氏の承諾を得て夏日の長きを膠水の氷らざる時節を選ひ昨今毎日模寫ニ通ひ居り候（レ）ヘリオ氏の研究室を使用いたし居り候）ヘリオ氏ニ数回面會ループルの方も九月ニ入りて初め多く存し居り候、大学の方も同時ニなる事と存しられ候 去月松本博士（亦太郎）（私ハ會はず）滞在中澤村氏と御相談の結果東京大学にて当地及伯林の燉煌高昌の模本を作製する事となり幸ニ当地在留中の長谷川（路可）か其の任ニ當る事ニ相成候 其後ルコック氏病氣全快先日澤村氏長谷川同伴にて伯林ニ向ひ候最早取かゝり居る事と推し候 模寫ハ歸來大学と交換再模寫を作

り度考に御座候

私の留学の期ハ過ぎ既に歸朝の途ニ上るへき筈ニ御座候へ共幸ニ此の期會ニやつて歸り度と存じ數ヶ月延引いたす譯に御座候 何卒御承知を願上候 就ては為念文部省への延期届を封入いたし候 必用ニ有之候へは何分とも宜敷様ニ御取斗ひ懇願申上候〔下略〕

素明は帰国後大正十四年九月に高島屋で滞歐紀念洋画展覽会を開いた。

⑤ 古画模写事業と模本展覽会

大正八、九年の頃より本校では古画研究、保存を目的とする模写事業の計画が起こり、日本画科卒業生による模写が行われ、作品は文庫に収められた。まとまった記録は残っていないが、本事業の推進者は結城素明と松岡映丘であったと考えられ、また、本学芸術資料館の台帳を見ると大正九年以降日本画科卒業生による模本の収録が数多く見られるところから、それらがこの事業の成果に該当すると考えられる。左記はその大正九年より十三年までの分である。

大正九年

吉村忠夫納入「方服披着法図」「過去現在因果経」

服部謙一納入「雪中御幸絵巻」

福田久也納入「本醍醐寺五重塔内四壁所貼菩薩像板絵」

塚本閣治(図案科卒)納入「職人盡」

同十年

渡辺幸雄納入「顧愷之女史箴並書」「金胎仏画帖ノ内金剛界曼荼羅」

日本画科納入「扇面古写経」

田上尚之納入「彦根屏風」(半双分)

同十一年

福田久也納入「太子絵伝」

吉村忠夫納入「太子絵伝」「金光明王絵」

服部謙一「蘇武」「扇面古写経」「太子絵伝」「柿の本人磨像」

大貫賢納入「売貨郎之図」

田上尚之納入「一遍上人藤沢道場」「一遍上人絵詞」「美人之図」

池田幸太郎納入「仇英十美人」

常岡文亀納入「燉煌発掘壁画摸本」(伊藤孝太郎、渡辺幸雄、

常岡文亀、根上富治、小野虎雄、勝山重英、鷹巢豊治、畠山

錦成、吉田金吉、山田廉摸写)

同十二年

田上尚之納入「津軽家蔵岩佐又兵衛筆浮世人物」

西保納入「頼焼阿弥陀縁起」「山菜筆少年調馬之図」

同十三年

鷹巢豊治納入「後藤祐乘画像」「後藤徳乘画像」「後藤栄乘画像」

伊藤孝太郎納入「後藤徳乘室画像」「西脇家蔵法然上人絵伝」

原田興家納入「李龍眠瀟湖臥遊図」(小村雪岱摸写)